

## 中国の言論統制に対する一考察（続）

卞 惟行

### A Study on the Speech Control in China (continued)

Iko Ben

Abstract: The problem of the speech freedom in China has been discussed a lot in the past year. For example, the resistance to the awards to the Nobel Peace Prize by Liu Xiaobo, and the oppression to the civilian procession which echoes to the democratized demand of the Middle East and so on. The domestic contradictions also are reported often in the recent years. But China is making an effort on focusing on the common "enemy" to the public, and trying hard to ensure the stable situation interiorly.

Key Words : freedom of speech, China's idea; modern history with humiliation, opposite interior structure

#### 一、ごく一般の出版物より

中国に行くと本屋に行き、よく旅行関係の書籍を購入するのだが、最近購入した『小女生大旅行』（女子学生の大旅行）<sup>1</sup>という体験記は、18歳の女子大生、許岩が汽車で中国全土を回り、泥棒に遭い、白タクに乗ったりしながらも、人に助けられ、友だちをつくり、旅行を続け、成長していくという話である。

この女子大生が、長春を旅したときの感想は、「歴史とは、まるでいたずら好きな妖精だ。常に関係のない人と事柄を結び付けてしまう。長春の歴史は間違っていない、しかし日本と結びついてしまったのは屈辱である。愛新覚羅・溥儀に罪はないが、彼が日本と結びついたのは弱さからだ。長春、溥儀、日本、傀儡が、まるで合理的に絶妙に配置され、あの振り返りたくない、しかし忘れることのできない歴史が始まったのだ。（中略）

幸いなことに、日本はすぐ国際正義からの懲罰を受けることになり、東北三省から追い出されたのは、彼らの最も好ましい末路だ。しかし日本はきれいさっぱり消えたわけではなく、孤児を残していった。それはまるで、この地に未練を残しているかのようなのである。

幸いにも中国人民は寛容で世話好きであり、これらの孤児を成人するまで養っただけでなく、安全に故郷まで送り届けたのだ、中国人の懐はなんと深いのだろう。辛さに耐えて、××事件がもたらした深い悲しみ、××戦争がもたらした損害など、まったく触れなかったのだ。

小泉首相が靖国神社を参拝するのは、大和民族の優れた伝統をひけらかし、祖先の「偉大な功績」を誇りとし、追想しているからだ。哲学の角度から言えば、本当の強さは証明などする必要はない。自分たちが強いとする人は、本当に強い人ではないのだ。

後世の人が、溥儀を評価するとき、時間と地域を越え、個人としての存在ではなく、歴史上の教科書となっている。」と語っている。

許岩は、別にベストセラー作家でもなく、出版社も色々な趣向を凝らして、本を売ろうとするので、

---

\* 教養部

女子大生の旅行記など絵になるし、新鮮味もあるのだろう、彼女はあとがきに何度も原稿の書き直しをさせられたと述べている。中国の報道、個人の考えも時勢の都合のよいように書き換えられてしまうのは、以前に記したとおりである

この『小女生大旅行』が世に出たのが、2007年2月、実際この許岩という女子学生が旅をしていたのは2004～2005年で、正に反日デモなどが燃え盛っていたときである。

中国では、政治的な問題は立場を鮮明にする必要がある。例えば文化大革命のとき親が党から「反革命」<sup>2</sup>と断罪されると、子供は「劃清界線」<sup>3</sup>と自分の立場をはっきりさせた。

私が中国に行くようになった70年代後半、80年代初めには、知人がよく家に招いてくれたが、家の玄関に「五好家庭」<sup>4</sup>と書かれたプレートが掲げられていた。今でも、田舎の方に行けば、「中国共産党万歳！」、「抓革命、促生産！」（革命に力を入れ、生産を促進しろ！）などのスローガンが赤いペンキで建物に書かれているのが残っており、当時の人民公社<sup>5</sup>は、党の政策やスローガンに忠実であると知らしめていたのである。

このように中国では、(政治的に)自分の立場を説明することは、とても大事であり、もちろん、それは中国当局の意に沿ったものでなくてはならない。

以前、香港で大学時代の同級生から尖閣諸島の帰属について自分の意見を聞かれた。私は食事の席で政治的なことを話す必要もないし、もしこのことを論じるのであれば、本当によく歴史や地理などの問題を学んでからでないと語る資格はないと思い、はっきりとは答えなかったのだが、私の同級生夫妻からは、「おまえは自分の立場をはっきりさせない、ずるい奴だ！」と叱られてしまった。

## 二、歴史上の定説

中国では、「六・四」天安門事件や度重なる汚職で、求心力のなくなった共産党政府および江沢民の「加強愛国主義教育」<sup>6</sup>の音頭のもと、90年代半ばより、日本の侵略の歴史を更に深く、憎しみを込めるように学校でも教育している。この、ベストセラーでもない「旅行記」でさえ日本を糾弾するという立場を鮮明にしているのである。

中国では、「歴史」は特別なものであり、王道を進むものだけが、歴史を語ることが出来るのだ。例えば、娯楽番組に属するような時代劇でも清の乾隆帝<sup>7</sup>は必ずいい物であり、宋の秦檜<sup>8</sup>は売国奴としての評価が大多数を占め、その銅像には、かつて唾を吐きかける人が多くいた。（現在は禁止されている）日本では、近年のNHK大河ドラマの中での徳川家康は、『天地人』（2009年）の中では、悪役だったが、今年の『江』では、肯定的な人物として描かれている。ドラマや小説では、原作者の意図によって歴史上の著名な人物でも性格づけは変わるが、中国では、それは許されない。

中国のモンゴル族の作家、歴史家である張宏傑<sup>9</sup>氏は、中国人ほど日本に対し複雑な感情を持っているものはないとし、日本の経済発展や官僚の清廉さなどに一定の評価をしながらも、「日本民族のどの良い面の裏側にも同様の欠点を背負っている。まずひねくれていて傲慢である。恐らく外からの荒波に遭ったことがなく、若くて、気が短く、冷静さを欠き、落ち着きがない、少しの成果で得意になる。明治維新の後、日本は栄え、中国は衰え、日増しに強くなっていく日本は、中国が列強に凌辱されている姿を見て、湧き上がったのは同情ではなく、蔑視だった。彼らの眼中には、昔は、聡明で優秀だった中国人もただの烏合の衆だったと見なし、日本人こそが真の優秀な民族であり、中国という大国の影響下で生活してきた彼らの心の中に邪悪な快感が沸き起こってきた。（中略）

日本の第二の突出した欠点は、利己的であることだ。古くから外との接触がなく自己中心的で、ひね

くれた性格が養われた。彼らは他人がどう考えるかが分からず、他人の立場に立って考えることができない。全てが自分の立場からだけで、もらっただけで、与えることをしない。

日本の第三の致命的な弱点は、絶対的な価値観をもっていないことだ。チビの日本人は、目的を達成するためには手段を選ばない。戦争のときに日本人がもっとも得意としたのは奇襲である。彼らは暗闇の中にいる動物のようであり、自分の獲物に狙いを定め、チャンスが来れば襲い掛かるのだ。日清戦争のときも、日露戦争のときも、太平洋戦争のときもそうだった。」と挙げ連ねている。

張宏傑氏のこのような考えは、多くの中国知識人の考えを代表するものであるが、評論家、文明史家の黄文雄<sup>10</sup>氏は、その著作『中華思想の罫に嵌った日本』<sup>11</sup>で「しかし、いかに自己中心的な中国人でも、近現代における日中の格差に触れないわけにいかない。そこで、なぜ日本に近代化ができて、中国ができなかったのかを問うと、次のように弁明するのである。

中国は日本の近代化のために犠牲になったのだ。明治維新を境に、日本は中国の恩義を忘れて西欧化し、中国を侵略して財産を略奪した。それを基礎にして日本は近代化に成功し、戦後もそうした財産で経済大国になった、と。(中略)

さらに続く。日本人が中国人に恩義を忘れたのは、中国人が寛大すぎたからだろう。恩を忘れ、義を負おうとしない日本人は極悪非道な民族である。中国人がこれほど自己犠牲をしても日本人は感謝しないし、反省もしていない。なぜみずからの罪を認めようとしないのか。

日本は中国史上最大の仇人で、血債は累々と残っている。中国人は「恩をもって恨みに報いる」のに、日本人は「恨みをもって恩に報いる」。釣魚島（尖閣諸島）は、当然中国の不可分な領土であるが、日本人はわれわれの領土を盗み、教科書を改竄し、戦犯をまつっている靖国神社を参拝して中国人民の感情をさかなでする。」と述べ、「中国の知識人の考えは身勝手であり、自国を有利にするための政治的認識しかしようとしない。」「知識人とは思えないほど無知である。」と断罪している。

### 三、中国とアジア各国との関係

張宏傑氏は、「日本は世界でもっとも豊かな国でありながら、アジアではケチという名声を得ている。第二次世界大戦で隣近所に大きな迷惑をかけ、アジアに本当の友だちなどいない。」と述べている。現在の中国は、どうなのだろうか。

東アジアの中国、韓国、北朝鮮では強い反日感情が噴出することがある。しかし東南アジアも日本の侵略を受けた地域だが、おおむね日本には良い感情をもっている。逆に中国は、インドネシアなどでは華人（中国系）排斥運動が起こったし、今も多くの国と領土問題を抱えている。

台湾は、中国からすれば「神聖な領土」であるが、中国のインターネットメディア（環球網）2009年7月14日号に掲載された、台湾の財団法人「金車教育基金会」主催のアンケートで、台湾にとって経済面で重要な国（地域）は、第一位がアメリカで84.4%、第二位が中国大陆で78.7%、第三位が日本で75.7%と経済面では中国に期待しながらも、最も友好的な国（地域）の第一位では日本で44.4%、一方最も非友好的な国（地域）は中国大陆で82.9%だった。（複数回答可）

私個人の経験でも昨年、体験したことで、アモイで東南アジア華語（中国語）文学のシンポジウムに参加したとき、中国側の一部の会員も自分たちの研究が、「辺縁文学」（辺境文学）と呼ばれていると不満を漏らしていた。文学研究の中でマイナーであることと、東南アジアの華人の多くが、かつては、中国大陆から逃げ出した人たちであること、そして地理的に中国の南にあり、いくつかの国は、中国文化の恩恵を受け、自分たちより下と考えていることなどが要因と思われる。

また、台湾では、ツアー旅行に参加中、ガイドから、宿泊予定のホテルには、「寝巻きは置いていません。」と告げられた。なんでも中国からの宿泊客に寝巻きや備品、壁にかけてある絵まで持って行かれることがあるそうだ。とてもアジアの周辺諸国の「先生」がやる行為とは思えない。

#### 四、多くの対立構造

中国では、「民族の大団結」、「和諧社会」<sup>12</sup>などのスローガンを毎日のように耳にする。しかし実際そのような、社会であれば、スローガンなど必要ないだろう。

今回、日本で3月11日に発生した東日本大震災後の福島第一原子力発電所での放射能漏れのニュースは、瞬く間に国外にも報道された。3月17日の『読売新聞』には、「中国中南部の沿岸地方を中心に16日から「ヨウ素入り食塩は放射能被曝の予防に効果がある」などのうわさが広がり、買占めでスーパーや商店の食塩が相次ぎ在庫切れとなっている。国営専売会社の中国塩業総公司是17日、「供給は十分」とする緊急通知を発表した。」

さらに「中国ではヨウ素添加と無添加の2種類が販売されているが、いずれも売り切れが続出しているという」と報じている。

災害が起きたとき、その国の真の国力を見ることが出来るが、中国はこうしたときにデマがよく流れ、パニックになることが多い。今、にんにくも多くの店で品切れになっているそうだ。

中国でも過去に何度も大地震が発生しているが、1976年7月28日の唐山大地震は公式には死者242,419人だが、文化大革命の最中で自力更生と外国からの救助の要請をすべて断り、これが多数の死者を出した要因の一つといわれる。実際の死者60万～80万を超えているとする見方もある。

2008年5月12日の四川大地震は記憶に新しいが、学校の校舎が倒壊し多くの若い命が失われた。地元政府と建築業者が甘い汁を吸うため、手抜き工事したためだ。インターネットの書き込みには、「今回の日本では、多くの学校が避難所になっているが、こちらではまず学校から潰れている。」と皮肉っている。このように危機に瀕したとき、一般市民は政府など信じてはいない。

政府内、政治家の権力争いは、どこの国でもあるだろうが中国の場合、「お上と庶民」、「開発業者と庶民」、「漢民族と少数民族」、「都市と農民」、「中央と地方政府」など対立の構造がいくらかもある。これは、今の中華人民共和国に限らず、中国には昔から不変の対立構造がある。

#### 五、中国人の特質

「在家靠父母、出門靠朋友」（家では両親に頼り、外では友人に頼る）、「上有政策、下有対策」（上に政策あれば、下に対策あり）は、よく知られた中国人の处世術である。地縁血縁に頼り、信頼できるのは身内だけ、それは、お上とて同じことで、中では内ゲバ、下には厳しい取り決めを行う。国民のための法ではないから、抜け道を探す。今でも中国に行けば車も人も列を守らず、強引な割り込みに遭うし、汚職の数と金額はけた外れだ。

中国革命の父と称される孫文はかつて、自らの民を「砂のような民族だ」と評した。一方、中国現代文学の父と称される魯迅は、ソ連のスパイとして処刑される自国民をニヤニヤ笑って見物する庶民の映像で見て、文学を志すようになった。

このように非常に利己的で自分勝手な面がある中国だが、例えば、日本でも今回の地震で、スポーツ選手や芸能人、或いは企業、団体が寄付をしたことが報じられたが、義捐金の額は、それぞれの気持ちなので、特に大きく話題になることはない。しかし中国では、企業や芸能人の寄付の番付がインターネ



ットに発表され、金額が少ないと叩かれる企業や個人がいた。

ネットでの個人攻撃は韓国でも多く見られるようだが、中国でも、その攻撃性を垣間見ることができる。

## 六、変わらぬ対日観

最近、中国もインターネットによって、どのような階層の人でもいち早く情報を手に入れることができるようになり、例え、当局が有害と思えるサイトは削除されるにしても、比較的容易に多くの情報を入手できるようになった。

近年、日本でも中国はインターネットの普及によって世論は変わるとする、新聞報道や書籍も数多く見られる。その中で、西本紫乃<sup>13</sup>氏は『モノ言う中国人』<sup>14</sup>の中で最近「話語権」という言葉がよく使われるようになり、それは言論の自由とは、また違った意味で、中国では、伝統的にものを言う権利を擁しているのは官僚や知識人だけだったのだが、一般の庶民も公的な場所で物申す権利を主張するようになったとし、世論がインターネットと、どう関係しているのかを述べている。

たしかにインターネットは、劇的に中国の一般市民に情報を与え、情報を発信するツールになった。しかし西本氏が言うように中国のネットユーザーは圧倒的に20代～30代の人たちである。彼らは90年代の「愛国主義教育」を受けた世代であり、その言論はまだ成熟していない面もある。だが、中国ではテレビが普及したのも、この20～30年ほどである。

70～80年代、私が中国にいたときも映画、ドラマで日本人が悪役である場合は多かったし、「馬鹿野郎！」というセリフは、よく聞かされた。また学校の地理の授業で教師は、公然と「沖縄は、中国の領土だ！」と語っていたし、経済的に豊かな日本にあこがれを持っていても、反日感情はあったし、90年代半ばからの「愛国主義教育」で反日教育がおこなわれた時期が、ちょうど中国の経済が発展し生活水準が向上し始めた頃と重なり、庶民は自信を持ち始め、むしろここ数年、中国人の日本人に対する本音がよく出ているのだと思う。

## 七、最後に

数年前、ある中国のテレビ番組で、「何台ものキャノンのカメラの同じ箇所ばかり故障して、日本はよい製品はすべて欧米に輸出し、中国には劣悪品を売りつける。しかし中国の人民は今では自分を守る術を知っている、日本のずる賢いやり口は、もう通用しない。」と報道していた。だが冷静に考えてキャノンが、13億人の大市場で、自らの製品を貶めるようなことはしないだろう。善悪以前に、自分たちが不利になるからだ。

このように戦争や侵略以外のことでも、日本は「悪」と報道している。

中国は、ばらばらになりやすい国民性であるが、少数民族に対しても「五十六個民族皆兄弟」（56の民族は、皆兄弟である。）と中華民族という概念を植えつけている。しかし、その中華民族も、せいぜいこの100年の間に作られた概念である。

経済発展の影で、「貧富の差の拡大」、「官僚の汚職」、「不当な立ち退き」、「就職問題」、「民族問題」など問題は山ほどある。

しかし共通の敵がいれば、団結を促すことができる。『三国演義』における魏の曹操、先に述べた宋の秦檜など、実は中国人は、みんなが憎しみを込めることができる悪党を望んでいる節がある。

そういった点で、「悪役日本」は、当局の側からも、庶民の側からも中国にとってはまだまだ必要で、

今のところ中国の反日教育、メディア政策は成功しているのではないだろうか。

注釈

- <sup>1</sup> 『小女生大旅行』 許岩著 広東旅遊出版社 2007 年
- <sup>2</sup> 反革命：革命に反対する。中国では罪状に使われる。
- <sup>3</sup> 劃清界線：明白に一線を画する。文化大革命のとき、反革命と断罪された親族や教師と決別し、自らの立場をはっきりさせるために、よく使われた。
- <sup>4</sup> 五好家庭：五つの面すべてが良い家庭。1979 年から始まり。婦女連合会などによって、全国に広がったキャンペーン。内容は地域によって様々。
- <sup>5</sup> 人民公社：1958 年、毛沢東の指導の下、生産合作社と地方政府機関を一体化して結成された。1982 年の憲法改正により、政社分離の原則により解体される。
- <sup>6</sup> 「加強愛国主義教育」：愛国主義教育を強化する。当時の国家主席江沢民が 1994 年に指示した。
- <sup>7</sup> 乾隆帝：1711 年～1799 年。清の第六代皇帝、在位 1735 年～1795 年。清の最盛期に外征を行い、西域を国土化したほか、チベットにまで帝国の版図を広げた。
- <sup>8</sup> 秦檜：1090 年～1155 年。宋の宰相、主戦論者をおさえて 1142 年、金と和議を結んだ。また岳飛ら政敵を獄死させたため、後世奸臣視された。
- <sup>9</sup> 張宏傑：1972 年遼寧省生まれ、モンゴル族。東北財經大学卒業。渤海大学中国文化及び文学研究所勤務。中国作家協会会員。
- <sup>10</sup> 黄文雄：1938 年台湾生まれ。1964 年来日。明治大学大学院修士課程修了。文明史家、拓植大学客員教授。中国を批判する著書を多く執筆している。
- <sup>11</sup> 『中華思想の罫に嵌った日本』 黄文雄著 日本文芸社 2002 年
- <sup>12</sup> 和諧社会：調和のとれた社会を意味し、胡錦濤政権が掲げるスローガン。
- <sup>13</sup> 西本紫乃：1972 年広島県生まれ。元外務省専門調査員（在中国日本大使館）。現在広島大学大学院社会科学研究科後期博士課程在学中。
- <sup>14</sup> 『モノを言う中国人』 西本紫乃著 集英社新書 2011 年

引用文献：

- 1、『小女生大旅行』 許岩著 広東旅遊出版社 2007 年
- 2、『中国人的性格歷程』 張宏傑著 陝西師範大学出版社 2008 年
- 3、『中華思想の罫に嵌った日本』 黄文雄 日本文芸社 2002 年
- 4、『モノを言う中国人』 西本紫乃著 集英社新書 2011 年

（平成 23 年 3 月 31 日受理）